

初級中国語のための語彙表比較

——中国語教育学会『中国語初級段階学習指導ガイドライン』と新 HSK 一～三級——

浦山 あゆみ ・ 一 澤 美 帆
清 原 文 代 ・ 田 邊 鉄

1 緒 言

本稿は、「紙と e-Learning を繋ぐワンソース・マルチユース教材の開発」
(研究代表者：清原文代)⁽¹⁾の専用 HP で公開した中国語教材 2 『基礎中国語の
単語と例文』(著者：浦山あゆみ・方紅・田邊鉄・清原文代。以下、教材 2 と略称す
る)を作成するために収集したデータを、一覧表の形にまとめ(以下、本稿一
覧表)、広く提供するものである。なお、上記専用 HP 上の教材 1 『中国の
大学生と話そう！—让我们互相学习吧！』(著者：清原文代・韓艶玲・浦山あゆ
み・田邊鉄)および教材 2 は Creative Commons License の表示—非営利—
継承(CC BY-NC-SA 2.1)で公開しているが、本稿も同じ条件で公刊・公開
する⁽²⁾。

はじめに、教材 2 について説明しておきたい。教材 2 は入門初級から中級
レベルにかけて必要と思われる約1000の単語やフレーズについて、簡体字・
繁体字・pinyin・日本語訳・それら単語を使った中国語例文とその日本語訳
等のデータを、表計算ソフト(Excel)を用いて一覧表にした中国語教材であ
る。中国語教育を行う者は教科書等を使って授業をする際、往々にして教科
書等に沿った補助資料を各自で作成する。教材 2 はそのような補助資料とし
て応用できるように提供するもので、Excel 文書であるため、ソート・抽出
等により自由に加工できるようになっている⁽³⁾。教材 2 にはタグをつけること

(1) <http://xunyicao.iic.hokudai.ac.jp/kaken>

(2) このライセンスについて詳細は <http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/> を参
照のこと。

(3) 補助資料として応用した具体例の一つに、清原文代「デジタルフラッシュカードの作り方〜

によって、使用者が独自の用途を設定して応用できるよう工夫した⁽⁴⁾。さらに、中国語例文は10字以内の短文とし、学習者が暗記しやすいよう配慮したものである。

教材2を作成するにあたって、筆者達は基礎となる書籍を参照した⁽⁵⁾。次の資料である。

- ・中国語教育学会学力基準プロジェクト委員会編『中国語初級段階学習指導ガイドライン』⁽⁶⁾（2007年3月）＝以下、教育学会
- ・『新汉语水平考试大纲 HSK 一级』（商务印书馆2009年10月）＝以下、H1
- ・『新汉语水平考试大纲 HSK 二级』（商务印书馆2009年10月）＝以下、H2
- ・『新汉语水平考试大纲 HSK 三级』（商务印书馆2009年12月）＝以下、H3
- ・『现代汉语词典』第5版（商务印书馆2005年6月）＝以下、現漢⑤

実際に教材2を作成する過程でこれらの書物を対照していくうちに、いくつかの問題にぶつかった。一例を挙げると「年 nián」がある。教材2では原則として品詞分類は現漢⑤に従うこととしたのだが、「年 nián」は現漢⑤では二つの品詞（名詞・量詞）とするのに対し、教育学会・H1は分けずに名詞のみとする。また、日本の一般的な中国語辞書類は、名詞とするものと、品詞をあえて明記しないものが混在している。このような例は、筆者達にとっては悩ましいことがらではあったが、中国語の文法研究や教科書編集といった別の視点からみれば、興味深い問題であるかもしれない。もしそうであるなら、博雅の方々の研究や教育に役立てていただければ幸いである。そう考え、本稿を公にすることにした⁽⁷⁾。稿を整理している間に『现代汉语词典』第6版（商务印书馆2012年6月。以下、現漢⑥）が刊行されたため、急遽こ

音が出てゲームもできる単語カードを無料で作る！」（http://www.las.osakafu-u.ac.jp/~kiyohara/JACLE_Kansai_2012_Quizlet/）を紹介しておく。

(4) タグ付けの意義と利用法については、田邊鉄・清原文代・浦山あゆみ「『タグ付け』を利用した言語教材開発・共有のためのフレームワーク」（『2011PC カンファレンス論文集』2011年8月）を参照されたい。<http://gakkai.univcoop.or.jp/pcc/paper/2011/pdf/79.pdf>

(5) 他にも中国語辞書やピンイン分かち書きにかんする論考等を参考にした。

(6) 教育学会は <http://www.jacle.org/storage/guideline2.pdf> より入手できる。

(7) 検索等の便を考え、上記の専用 HP にもアップロードするので、参照されたい。

れも併せて参照し、さらに本稿一覧表に加えることとした。

2 基礎資料の説明

次に1で挙げた基礎資料について、補足説明を加えておく。

(1) 教育学会

まずは本稿一覧表の基軸となる教育学会について説明する。

教育学会は、日本の中国語教育に対して初級段階の基準を示すために作成された冊子である。主として「文法項目表」と「学習語彙表（第一表・第二表）」「総表（別表も含む）」の三本柱から成り、この三つは対応関係にある。教育学会の掲げる初級段階とは、日本の大学における第二外国語として毎週2回（1回90分）、2年間を通じて中国語を学んだ場合の、合計240時間の課程を指している。「学習語彙表」はこの初級段階において習得すべき語彙を列举したもので、第一表600語と第二表400語の合計1000語が収録される。第一表は基本語彙、第二表は準基本語彙であり、別表は初級段階で必要な常用あいさつ語と常用固有名詞を掲げる。第一表と第二表の語彙には番号・ピンイン・品詞が付いている。

教育学会のピンイン表記は日本の辞書類にもよく見られることだが、ダブルスラッシュが入る。離合詞や複合方向語のように、間に他の成分が挿入されうる語彙に適用される（例：生气 shēng//qì, 回来 huí//lái など）。

品詞は現漢⑤の分類にしたがい、名詞・代詞・動詞・形容詞・数詞・量詞・副詞・介詞・接続詞・助詞・感動詞・擬声語の12品詞を採る。「学習語彙表」の単語はすべて品詞分類されているが、実際の「学習語彙表」にはこの12品詞以外の「数量詞⁽⁸⁾」や「接辞⁽⁹⁾」（後置成分）という分類も散見される。また、附類⁽⁹⁾は現漢⑤とは異なっており、「学習語彙表」には助動詞がない。ただし、「文法項目表」の「8 品詞」には動詞の附類として助動詞を掲げているが、語彙表では助動詞としては表記せず、上位分類の動詞と表記している。この点、後述する H1・H2・H3 の「语法」の品詞分類とは違いが見

(8) 実際には現漢⑤にも数量詞（词类标注には見えない品詞）が出現するからであろう。

(9) 附類とは、品詞をさらに細かく分類するものである。教育学会では下位分類と称している。具体的には現漢⑤ p 6「5 词类标注」を参照。

られる。

(2) H1・H2・H3

新 HSK は、筆記試験は 1～6 級に分かれており、各級のレベルと語彙量について簡潔に紹介すると、1 級は中国語の簡単な単語とフレーズを理解しているレベル (CEF⁽¹⁰⁾ の A1 相当) で、習得語彙量は 150 語である。2 級はよく知られた日常的な話題について簡単な交流ができるレベル (CEF の A2)、語彙量は 300 語。3 級は生活・勉強・仕事等において基本的なコミュニケーションを行えるレベル (CEF の B1)、語彙量は 600 語。4 級は幅広い範囲の話題について討論できるレベル (CEF の B2)、語彙量は 1200 語。5 級は中国語の新聞や雑誌を読んだり、映画やテレビを鑑賞し、スピーチもできるレベル (CEF の C1)、語彙量は 2500 語。6 級はニュースをスムーズに理解でき、口頭であるいは書面で流暢に自分の意見を述べられるレベル (CEF の C2)、語彙量は 5000 語以上となっている。

新 HSK は中国国内はもとより日本を含む 88 の国と地域で実施されており、その語彙表は特定の母語話者を考慮したものではないが、新 HSK を日本で実施する団体のホームページによれば、1 級は大学の第二外国語における第一年度前期履修程度、2 級は第一年度後期履修程度、3 級は大学の第二外国語における第二年度前期履修程度、4 級は大学の第二外国語における第二年度後期履修程度⁽¹¹⁾としている。

本稿では、新 HSK 1～3 級を取り上げる。2 年次の授業が必修ではない大学が少なくないことを鑑み、日本の大学で第二外国語として中国語を学ぶ学習者を対象とする教育学会、特に 1 年次の授業に対応すると考えられる第一表を基準として比較を行うが、上述のように語彙数で一致するのは新 HSK 3 級であり、学習時間からみても第二外国語における初級に近い⁽¹²⁾ためである。

H1・H2・H3 はすべて「HSK 介绍・级介绍・样卷・样卷听力材料・样卷

(10) CEF は Common European Framework の略称で、ヨーロッパの国々の言語学習および言語能力の評価基準。

(11) <http://www.hskj.jp/level/index.html> 参照。

(12) 但し、数量では同じでも、本稿一覧表を見てもわかるように収録語彙はかなり違いがある。

答案・答题卡・成绩报告・考试要求及过程・语言功能・词汇・语法」より構成される。これらのうち筆者達が用いたのは「词汇」と「语法」の部分で、「词汇」部分は H1・H2 では品詞ごと（名詞・動詞・形容詞・代詞・数詞・量詞・副詞・連詞・介詞・助詞・嘆詞の11品詞。助動詞という分類は「词汇」には無く、動詞に含ませている）にグループ化してことばを列举し、さらにピンイン順にも配列する。只だ H3 の「词汇」部分のみ、ことばを品詞ごとにグループ化せず、ピンイン順に並べるだけである。したがって、H3 のことばのうち、H1・H2 には含まれないもの（300語）の品詞は明らかではない。

一方、「语法」は品詞と文法ごとに具体的文例等を挙げた部分である。品詞の附類は級によって少し異なる⁽¹³⁾が、代詞・数詞・量詞・副詞・連詞・介詞・助動詞・助詞・嘆詞の9品詞を掲げ、それに該当する単語やフレーズ・文例が示される。したがって、H3 の品詞が明らかでないことば（300語）であっても、「语法」部分で取り上げられているものは品詞を特定できる。但し、「语法」には名詞・形容詞・動詞はない。このように述べると、「词汇」と「语法」は細かく対応しているように思われるかもしれないが、現実はやや複雑である。例えば、H1 の「词汇」の代詞には「我・你・他・她・我们」という人称代詞が収められるが、「语法」の人称代詞を見ると「我・你・他・她・我们・你们・他们・她们」に増えている。つまり「词汇」にないことばが「语法」にあったり、「语法」にないことばが「词汇」に収められることもある。

（3） 現漢⑤⑥

現漢⑤⑥は中国語の基本辞書であり、特に説明する必要も無かろう。品詞分類の種類は5版・6版とも同じで、(1)の教育学会で述べた通りの12品詞である⁽¹⁴⁾。

只だ、ピンイン表記は独特の方式を採っているため、本稿と関わりのある部分のみを現漢⑤の「凡例 3 注音」により説明する。

(13) 例えば、H1 では助詞は構造助詞と語気助詞の2つだが、H2 では単語が増えるので動態助詞も加わる。

(14) 現漢⑥では収録語彙を3000語ほど増やしたり、又、一部を削ったりし、注音や見出し字にいくつか変更を加えたようである。変更点については、第6版の巻頭説明に詳しい。

* 轻声の扱い

i 轻声字は、声調符号を付けず、当該音の前に・を付す。

例) 便当 biàn·dang 桌子 zhuō·zi

ii 一般的には軽く読まれるが、時として声調があるように発音されるものは、声調符号を記し、さらに当該音の前に・を付す。

例) 因为 yīn·wèi

iii 語句の間に他の成分が入るか否かにより、声調が異なるものは、ダブルスラッシュを入れ注意喚起する。

例) 看见 kàn//·jiàn

→看见 kànjian 看得见 kàndejàn 看不见 kànbujiàn

起来 qǐ//·lái →起来 qílai 起得来 qǐdelái 起不来 qǐbulái

* 変調は反映させない。 例) 不错 bùcuò 一起 yīqǐ

このように、現漢の声調表記は、声調あり・軽読・轻声の3段階に分かれている点で、前述の(1)(2)とは大きく異なっている。現漢の表記は中国語の声調の実態をより正確に表していると言えるが、これは中国語母語話者を対象とする辞書の見出し語であるからこそ可能な方法であって、教材——特に初級者向けの教材に付す声調表記としては複雑である。前述の(1)(2)が声調あり・轻声の2段階表記なのは学習者に解しやすくするためであろう。但しその結果として、軽読の扱いに揺れが生じるという新たな問題が浮かび上がってくる。

以上、簡単に本稿一覧表とかかわりのあることがらについて、基礎資料(1)～(3)を説明してきたが、特に品詞について、教育学会・HSK・現漢の品詞分類を一覧表にして掲げておく。

〈品詞一覧〉

教 育 学 会		H1・H2	H1・H2・H3	現漢⑤・⑥
学習語彙表	文法項目表	词汇	语法	词类
名 詞	名詞 一般名詞 時間名詞 場所名詞 方位名詞	名詞 時間詞 方位詞		名詞 時間詞 方位詞
代 詞	代詞（代名詞） 人称代詞（人称代名詞） 指示代詞 疑問代詞（疑問詞）	代詞	代詞 人称代詞 指示代詞 疑問代詞	代詞 人称代詞 指示代詞 疑問代詞
動 詞	動詞 自動詞 他動詞 助動詞	動詞	 助動詞	動詞 趨向動詞 助動詞
形容詞	形容詞	形容詞		形容詞 属性詞 状態詞
数 詞	数詞 位数詞 係数詞 概数詞 数量詞	数詞	数詞	数詞
数量詞		量詞※	量詞※	数量詞
量 詞				量詞
副 詞	副詞 時間副詞 程度副詞 範圍副詞 関連副詞（重複，連続） 語気副詞 否定副詞	副詞	副詞 時間副詞 程度副詞 範圍副詞 頻率副詞 語気副詞 否定・肯定副詞	副詞
介 詞	介詞	介詞	介詞	介詞
接続詞	接続詞	連詞	連詞	連詞
助 詞	助詞 構造助詞 動作態助詞 文末助詞	助詞	助詞	助詞 結構助詞 動態助詞 語気助詞
感 動	感動詞	嘆詞	嘆詞	嘆詞
擬 声	擬声語			擬声
接 辞				

※ HSK では数量詞的用法のものも量詞に含ませている。

3 凡 例

最後に、本稿一覧表について説明する。

- (1) 教育学会に収められる語を縦軸としての「学習語彙1表」(〈表1〉)・「学習語彙2表」(〈表2〉)・「総表の別表」(〈表3〉)と教育学会にはなくHSKにある語(〈表4〉)の四種に分ける。
- (2) 横軸にある教育学会の「学習語彙表」の番号順に語を列挙する。但し〈表3〉のみ「常用あいさつ語」の語彙は「あ1」,「常用固有名詞」の語彙は「固1」のように略語を用い、別表に示す順に列挙する。

横軸の略語については以下の通り。

記	記号
番号	教育学会「学習語彙表」の番号
総号	教育学会「学習語彙表(1・2)総表(1~1000)」の番号
H級	HSKの級
教育注音	教育学会の注音
⑤注音	現漢⑤の注音
⑥注音	現漢⑥の注音
教育品詞	教育学会の品詞分類
H詞類	HSKの品詞
⑤詞類	現漢⑤の品詞
⑥詞類	現漢⑥の品詞

- (3) 記号とは、独自の印を付したもので、各記号の意味は以下の通り。

△ 品詞に異同が見られるもの

○ 注音(声調)に異同が見られるもの

但し「2基礎資料の説明」の(3)にある「変調は反映させない」注音は、異同と見なさない。

● 注音が同じもの

□ 現漢の⑤と⑥で異同が見られるもの

☆ HSKの品詞が不明。特に3級の多くがこれに該当するが、「语法」で品詞が判る語は含まない

★ 現漢で品詞を示さないもの

× 該当なし

※ その他, 注記すべきことがあるもの

- (4) 注音は原典のまま表記する。制限により 2 行にわたる場合は, ハイフンを入れる (例: zěnmeyàng → zěnme-yàng)。

但し、もともと空白がある場合はハイフンを入れずに空白部分で分かつ (例: gōnggòng qìchē)。

- (5) H 級の欄にある「1 語」「2 語」「3 語」とは, HSK 該当級の「词汇」には見られないが「语法」に出現することを示す。

- (6) 教育学会の品詞のうち, 「文法項目表」所収の語彙で附類が判るものは附類を記す。但し動量詞は「動量詞」と記し, 名量詞は「量詞」とした。

浦山あゆみ (本学准教授)

一澤美帆 (本学大学院博士後期課程)

清原文代 (大阪府立大学准教授)

田邊 鉄 (北海道大学准教授)

なお本研究は, 平成22-24年度科学研究費補助金 (課題番号22520574) の助成を受けた成果である。